



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「基本の運動」の本質と課題についての一考察
Author(s)	森山, 慎一; 大槁, 道雄
Citation	東京学芸大学紀要 . 第 5 部門 , 芸術・体育, 38: 135-147
Issue Date	1986-10
URL	http://hdl.handle.net/2309/4891
Publisher	
Rights	

「基本の運動」の本質と課題についての一考察

森山慎一・大橋道雄

保健体育学

(1986年6月10日受理)

1. ま え が き

戦後の約40年間の社会変化は、人類がかって経験し得なかった程の速度で、質的にも、量的にも目まぐるしく変化してきている¹⁾⁴⁾。

その間において、体育・スポーツに対する社会的認識も多様になってきている³³⁾。1つには、アマチュアスポーツとプロスポーツの共存の時代への流れとして示された「新スポーツ憲章」である²⁾。他方、社会体育・スポーツの面においても、各種スポーツクラブの深化と拡大の傾向でもある。また、体育か、それともスポーツかという呼称の論争も一方ではなされている³²⁾。

これらの現象は、今後の我国の学校体育の方向性を根本的に変化させてしまう要因とも成り得させる可能性を秘めているのではないかと予測される³⁴⁾。

このような体育・スポーツの思潮の中で、我国の学校体育の内容構成においても初めて、現行の学習指導要領が「基本の運動」を、その名称とともに独立した運動領域として提示した。理論的には、戦後のそれぞれの時期に示してきた学習指導要領の改訂の過程で、小学校・低学年及び中学年の児童の発達段階や適時性を考慮し、未組織、未分化という運動群の総称を「基本の運動」として提示し、「ゲーム」の運動領域に対応して位置づけた⁷⁾。また、「基本の運動」の設定の観点としては、運動の特性論と欲求の充足という2つの大きな捉え方が背景になっている²⁹⁾。

しかし、未だに教育実践の場では、「基本の運動」の理念と実践の方法が明確にされていないのではないかと考えられる。このことは、「基本の運動」の理念が実践を踏まえた時、初めて、運動の特性論と欲求の充足という相克の中で不合理性が表出してくるのではないかと思われる¹³⁾³⁴⁾。

よって、小学校期における「基本の運動」を現段階で見直し、その理念の分析と実践との関連性を考察することは、今後も学校体育の基礎をなしていく小学校・体育科教育の方向性を考えていく貴重な一資料になり得るのではないかと考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現行の学習指導要領において初めて内容構成されてきた「基本の運動」の理念と実践との関連性を分析し、考察することによって今後の学校体育の方向性を模索する基礎資料を得ることである。

3. 本 論

3.1 学習指導要領の変遷とそこにおける「基本の運動」の位置づけ

第二次世界大戦での敗戦は、それまでの我国における、社会機構、思想といった、国のあり方そのものを根底から変えていった。いわゆる天皇主権から国民主権へ、また、軍国主義から自由主義への転換であった。この転換は、教育及び体育へも強く、戦前からの方向転換を求めたものであった³⁾。

米国を主とした占領国は、我国を前述の方向へ軌道修正するために、民間情報局 (C・I・E, Civil・Information・Education) から4大教育指令³⁵⁾を出して、具体的な教育改革のすみやかな実行を求めた。この指令と、米国教育使節団報告書 (Report of the United States Education Mission to Japan) にある内容と照らして、文部省は「新教育指針」⁸⁾を表わした。

この新教育指針の内容を受けて1947年(昭和22年)に出されたのが、戦後における最初の指導要領と言える「学校体育指導要綱」である。「要領」とはせずに「要綱」として出されたのは十分に内容を整える時間的余裕がなかったためであった³⁰⁾。したがって、昭和24年に出された「学習指導要領・小学校・体育編・昭和24年施案」の体育の目的、目標についても基本的にはほとんど変わりはない。

これらの目的、目標は、民主国家の構成員である、一人一人の国民の人間性の開発をめざすものとしての体育が位置づけられた。この方向性は、体育の民主化と科学化を2つの柱として、スポーツの導入、画一的指導法の打破、体育の生活化といったことになる⁵⁾。

このように、体育においては、戦前の体育を旧体育と概念規定した上での戦後の我国における「新体育」の誕生である³⁷⁾。他方、新教育の理念であるデューイの経験主義教育を背景とする問題解決学習が教育実践の場へ広まっていった。また、新教育の理念を実践するカリキュラムとしての方法の1つであるコア・カリキュラムの研究が進むにつれて、体育のカリキュラム構成上の種々の問題が出てきた。それは、一方では、健康教育は別としても、コアとの関連で具体的な運動をどのように位置づけるかという問題であり、他方、カリキュラム構成と単元構成の問題であった³⁶⁾。このことは、昭和20年代後半から台頭してくる系統学習とも関連することになった。

このような過程で昭和26年の学習指導要領一般編の中へ「単元学習」という形で学習内容及び学習指導法が示された。この発展として、昭和28年の改訂が行なわれたといえる。すなわち、体育の理念そのものの変化はないがまず体育科の位置づけを明確にし、体育の一般目標を述べさらに、具体的な目標を明示した。

また、目標、内容(教材)、指導法は、一貫させていくという方針の下で改訂が試みられた。しかし、評価については、抽象的な表現になり、具体的な方策がないままであった。一方、指導法についてはグループ学習至上主義という批判がでるほどの勢いで、グループ学習の考え方が各地に広まった³¹⁾。

昭和33年の改訂は、昭和20年代後半における諸々のコア・カリキュラム批判に答えようとして提示されたと言える。それは、体育の内容領域を表現、社会、経済、健康の4つの教育への視点と、経験発展の層を、生活実践課程、問題解決課程、基礎習得課程の3つの教育課程を総合した、三層四領域の構造の考え方として導入された⁴³⁾。

また、カリキュラム論争としては、経験カリキュラムか教科カリキュラムかのどちらかにしなければならないという思考段階であり、輻輳説すら展開する余裕がない。米国の体育の翻訳、模倣の色彩が強くまだ残っている時期であった。

教育実践の場においては、形式的には子ども達の運動欲求や自発性の重視を強調する一方で、内容的には教師中心の指導型であった。

この頃の我国は、経済的にもその成長が加速化しはじめた頃であった。この社会的背景は、系統的指導による基礎学力の充実を教育及び体育に要求していった。また、「試案」、すなわち、教師の手引書的な性格から法的な意味での「基準性」が学習指導要領に強められていった時期でもある⁴²⁾。

昭和43年の改訂での体育に関する特徴は³⁸⁾、「体力の向上」という目標が前面に押し出されてきたことである。この目標の推進の手法として、総則体育の重視も1つにはあげることができる。このことが表出してきた社会的要因としては、高度経済成長政策下での「人づくり」における「体力づくり」という、体育への社会的要請の面と、生活様式、公害問題、都市化現象といった高度経済成長政策がもたらした歪からの、体力の低下や健康阻害等への補強、また、東京オリンピックを頂点とするスポーツ振興、発展の流れも他方において考えられる。

なお、改訂の具体的な特徴としては、運動技術の構造化がさらに深められ、価値ある運動文化を選択し、次に、その内容を明らかにする立場をとる、いわゆる、運動特性論の強調化を指摘することができる。

これらのことは、昭和33年の改訂以降、高度経済成長と科学技術の重点化が、社会や教育実践の場において能力主義あるいは、技術主義の風潮をもたらし、様々な社会的矛盾を作り上げていったと考えられる。それ故、現行の学習指導要領の理念として、「人間性の回復」や「内容の精選化」という主旨が重要な事項として取り上げられるに至ったのである。

体育においては、健康な心身の育成のための体育、または、生涯にわたって運動・スポーツを楽しみ、健康の維持、発展の立場からの「生涯体育」の理念が強調されるようになった⁴⁴⁾。

これらの理念は、教育の内容、方法等においても、学校・教師の創意工夫の必要性をもたらした。また、運動の分類についても運動の特性が、前回の改訂より、一層、整理され、子ども達の適時性や発達段階を考慮し、子どもから運動をとらえた運動の特性を見直していった。このことの具体的な運動領域区分の提示が、小学校・体育科教育における、低・中学年の「基本の運動」及び「ゲーム」の位置づけであると考えられる⁴⁷⁾。

3.2 「基本の運動」の理念と内容構成

現行の学習指導要領の成立の過程は、昭和48年11月の文部省内における教育課程審議会への諮問から約3ヶ年間を経て、審議会からの答申という形式を踏んでからの結着であった⁷⁾。

この答申の骨子は、1. 人間性豊かな児童を育てる。2. ゆとりと充実のある学校生活をさせる。3. 児童の個性や能力に応じた基礎的・基本的な内容を精選した教育を行なう。の3点であった。これを受けて体育においては、(1) 健康の増進と体力の向上、(2) 生涯を通しての運動実践及び健康生活の実現、(3) 内容の基礎的、基本的事項の精選を体育の基本的教育目標として設定した⁷⁾。この中で、特に強調されていることが生涯体育・スポーツであり、子ども達の発達段階及び適時性からの学習内容の精選である。この2点が主たる観点となって、「基本の運動」の内容構成が行なわれたと解釈できる。(表1参照)

従来は、運動文化財の重視ということによって第1学年から第6学年まで同一の運動領域で構成し、それを児童に合せるといったことが大きな視点となっていた。それに対し、子ども達の発達段階と適時性に即して、低学年及び中学年の大部分は、「基本の運動」と「ゲーム」に大別して運動領域を設定した⁷⁾。

すなわち、子どもの立場からの欲求の充足を大前提として保障し、運動文化財を捉え直した。

表1 「基本の運動」の運動項目別授業時数参考例(時間) 15)

項 目	学 年			
	1年	2年	3年	4年
歩・走・跳の運動	20	21	11	11
力試しの運動	5	5	5	5
模倣の運動	10	11		
固定施設や器具を使つての運動	11	11	16	
用具を使つての運動	5	5	11	6
水遊び	10	10		
浮く・泳ぐ運動			10	10
小 計	61	63	53	32

表2 基本の運動・教材一覧表(第1学年) 16)

歩・走・跳 (20)	・リズム歩・走③ ・移動跳び③ ・全力走④ ・変化のある歩走④ ・川跳び③ ・ゴム跳び③
力 試 し (5)	・前まげ遊び ・足打ち跳び ・手たたき跳び ・かえるの足打ち ・ゴムくぐり ・押し出し遊び ・片足ずもう ・平均くずし
模 倣 (10)	・おもちゃ箱② ・動物集まれ② ・乗り物ごっこ③ ・うさぎの散歩② ・象の親子①
固定施設や 器 具 (11)	・またぎ越し・踏み越し② ・腕立て跳び上がり・跳びおり② ・ころがり遊び(マット)② ・鉄棒遊び② ・平均台遊び① ・固定施設②
用 具 (5)	・大波小波(長なわ)① ・両足跳び(短なわ)① ・転がし合い・的当て② ・輪転がし $\frac{1}{2}$ ・棒立てつかみ $\frac{1}{2}$
水遊び(10)	・汽車ごっこ ・鬼遊び ・石拾い ・水中じゃんけん

* 数値は配当時間数を示す

表3 基本の運動・教材一覧表(第2学年) 17)

歩・走・跳 (21)	・リズム歩・走…④ ・移動とび…③ ・全力走…④ ・川跳び…③ ・変化のある歩・走…③ ・持久走…② ・ゴム跳び…②
力 試 し (5)	・垂直とび ・向きかえとび ・かえるの足うち ・ゴムくぐり ・前曲げ ・片足ずもう ・押し出し遊び ・人はこび
模 倣 (11)	・野原の虫…② ・模型自動車…② ・小鳥の一日…② ・はたらく車…① ・遊園地…② ・動物園…②
固定施設や 器 具 (11)	・またぎ越し・踏み越し…① ・腕立て跳び上がり・跳び下り…② ・ころがり遊び…② ・鉄棒遊び…⑤ ・アスレチック遊び…①
用 具 (5)	・くぐりぬけ(長なわ)… $\frac{1}{3}$ ・回旋跳び(長なわ)… $\frac{2}{3}$ ・かけ足跳び(短なわ)… $\frac{1}{3}$ ・連続跳び(短なわ)… $\frac{2}{3}$ ・転がし合い(ボール)…① ・投げ上げ捕り(ボール)…① ・輪回しつかみ… $\frac{1}{3}$ ・輪くぐり… $\frac{1}{3}$ ・棒立て… $\frac{1}{3}$
水 遊 び (10)	・汽車ごっこ ・石拾い ・水中じゃんけん ・2人組での伏し浮き ・棒くぐり

* 数値は配当時間数を示す

体力, 健康の面では, 「調整力」の向上に小学校期の体育には主眼を置くことを明確にしたと言うことができよう⁴⁵⁾。(表2・3参照)

また, 「基本の運動」の捉え方としては, 従来の運動種目の枠をはずし, 「領域」としての強調があった。このことは, 1つには運動分類の方法であり, 他方では, 運動技能の構造化の相違性である。前者については, 運動形態(型)として, 歩・走・跳等, の表現で示し, その「領域」に基づいた「運動課題」として運動の学習を位置づけている。後者については, 特定の運動技能を手段として低学年及び中学年の大部分には学習上, 困難であるという理由から, 「運動課題」の追求としては, 「技能」を前面には出していない⁴⁸⁾。(表4・5参照)

表4 基本の運動・教材一覧表(第3学年)¹⁸⁾

歩・走・跳 (11)	・全力走③ ・変化のある歩・走② ・幅跳び② ・高跳び② ・持久走②
力 試 し (5)	・あおむけ姿勢からのブリッジ ・垂直跳び ・回転跳び ・腕立て伏臥腕屈伸 ・かえるの倒立 ・立位体前屈 ・押し合いずもう ・人運び ・手押し車 ・馬跳び馬くぐり
器 具 (16)	・腕立て跳び上がり・跳び下り① ・腕立て跳び越し③ ・前転③ ・後転③ ・さか上がり・前回り下り③ ・足かけ上がり・踏み越し下り② ・平均台での歩・跳①
用 具 (11)	・あや跳び(短なわ)① ・2人跳び(短なわ)① ・回旋跳び(長なわ)② ・投げ上げ捕り(ボール)② ・ボールつき② ・輪跳び① ・輪くぐり① ・棒つかみ①
浮く・泳ぐ (10)	・友だちの補助による伏し浮き ・補助具支持による伏し浮き ・補助具を使っのかえる足泳ぎ ・伏し浮き ・けのび ・面かぶりクロール

* 数値は配当時間数を示す

表5 基本の運動・教材一覧表(第4学年)¹⁹⁾

歩・走・跳 (11)	・幅跳び② ・全力走③ ・変化のある歩・走② ・持久走② ・高跳び②
力 試 し (5)	・腕立て伏臥腕屈伸 ・垂直跳び ・回転跳び ・かえるの倒立 ・あおむけ姿勢からのブリッジ ・立位体前屈 ・3人手つなぎ跳び ・人倒し ・手押し車 ・押し合いずもう
用 具 (6)	・連続あや跳び(短なわ) $\frac{1}{3}$ ・連続跳び(短なわ) $\frac{1}{3}$ ・2人跳び(短なわ) $\frac{1}{3}$ ・連続回旋跳び(長なわ)① ・キャチボール① ・トスバッティング(ボール)① ・輪投げ $\frac{1}{2}$ ・輪跳び越し $\frac{1}{2}$ ・棒の移動とり①
浮く・泳ぐ (10)	・補助具を利用したのクロール ・友達の補助による伏し浮き ・伏し浮き ・伏し浮きからの立ち上がり ・補助具を使っのバク足泳ぎ ・補助具を使っのかえる足泳ぎ ・面かぶりクロール ・クロール ・平泳ぎ ・いるか泳ぎ ・補助具を使っの平泳ぎ

* 数値は配当時間数を示す

これらの「基本の運動」の内容の分類は、表1から5に示した「項目」の通りである。なお、数字は時間数を示し、その配当時間は現行の学校教育法施行規則(抄)の別表第1¹²⁾に基づき森山ら¹⁴⁾の実証研究の報告書による、東京都の例である。

このように、「基本の運動」を従来の運動種目から分離させ、「未組織」、「未分化」の運動領域である運動群と設定したにもかかわらず、「基本の運動」を欲求充足のある、または、従来のスポーツ種目の1つの「かたまり」として子どもの側から設定したとしている⁴⁶⁾。

しかし、このことは、欲求充足の機能的特性の視点で捉える限り、「ゲーム」の領域と同様に1つの運動群としてはとらえられない。なぜならば、「運動のかたち」、「使われる道具」といった観点で内容構成をしたため、欲求充足の機能的特性である競争性、克服性、模倣性といった基準が一定ではなくなってくるからである。

また、各種の運動の「技能」を結果的に身につけさせ、あくまでも「運動課題」の追求を第1とすることについても教育実践と「基本の運動」の理念との間にギャップが生じる原因ともなっていると考えられる⁶⁾⁴⁰⁾。つまり、1つの現象として、中学年の1部及び高学年における運動領域区分への技能上の接点が理論的にも提示されていないという点である。換言すれば、学年段階に応じた運動技術をどのようにおさえ、子ども達の技能としていかに定着させていくかということが問題となつてこよう。

3.3 「基本の運動」の実際

「基本の運動」の理念を現行の学習指導要領の下で、肯定的に解釈し、教育の実践の場で行なう法的な抱束力あるいは基準性があることは周知のとおりである。しかし、その基準性は、現行の指導要領においては、教育実践の場でその運用の幅を大きく是認しているという点で、昭和22年、24年、28年のそれぞれの時期に出された学習指導要領と同じ傾向にあると言えよう。

その様な状況下の中で、全国各地において「基本の運動」を含めた教育実践とその実証授業研究が行なわれている。その過程で「基本の運動」に対する共通な課題としては次のような点が多くみられる⁴¹⁾。1つには、「基本の運動」における技術・技能の扱いとその運動領域と運動種目との関連における問題である。また、子どもの欲求充足と教材(内容)との関連性であり、反面、教師の教育的必要性の認識度とのギャップでもある。他方においては、個人差に基づいた指導と評価・評定も他の運動種目及び運動領域と共通した研究課題がある。しかし、前述のとおり、法的抱束力及び基準性は消滅した訳ではない。換言すれば、法に基づき教育実践を行なう義務がある。文部省の認める学校以外の学校においては²⁸⁾、授業研究等の実証研究の結果に基づく提言しか学習指導要領に対する批評、批難の方途がないのである。

その1つの実証研究が資料1に示した第3学年における「用具を使つての運動」と「器具を使つての運動」である。その前段階となった「基本の運動」の持つ運動課題の条件設定の分析が表6である。このことは、「基本の運動」の提示が「運動課題」を持って行なう学習であると規定された以上、「動き」の条件の変化、工夫を教育実践の場で行なう必要性がでてきたからである。

その「動き」の条件の変化、工夫が資料1にある「動きの幅の拡大」と「動きの質の高まり」といった観点で捉えることもできる。

また、「基本の運動」に対する教師の疑問点もしくは問題点についての意識調査が図1である。すなわち、総括的に分析すると体育主任を経験した教師団は、「基本の運動」はどんな動きがどのようにできればよいかという疑問点または問題点で悩み、他の教師団は、どのような教材を「基本の運動」で扱えばよいか同様に悩んでいる。

資料1. 実証授業研究例²¹⁾

第3学年

1. 単元用見を使っての運動 輪「輪くぐり」・棒「棒つかみ」
器具を使っての運動 跳び箱「腕立て跳び越し」

2. 教材と研究主題との関連

学年	教材	扱わない	扱った	◎	⊗	○	◎-⊗
3	腕立て開脚跳び	1%	99%	84%	0%	16%	22-0
3	腕立て閉脚跳び	20	80	35	13	52	7-9

動きの幅の拡大	動きの質の高まり
<ul style="list-style-type: none"> いろいろな腕立て跳び越しができる。 開脚で跳び越せる。 閉脚で跳び越せる。 横跳びで跳び越せる。 	<ul style="list-style-type: none"> 腕立てで跳び越せる。 安定した姿勢で跳び越せる。 一段高い跳び箱を跳び越せる。 他の動きと連続して跳び越せる。

3. 単元計画

分	時	1	2	3	4	5
15		輪・棒を使っての運動		輪を使っての運動	棒を使っての運動	輪・棒を使っての運動
30		腕立て跳び越し				
45		腕立て跳び越し				

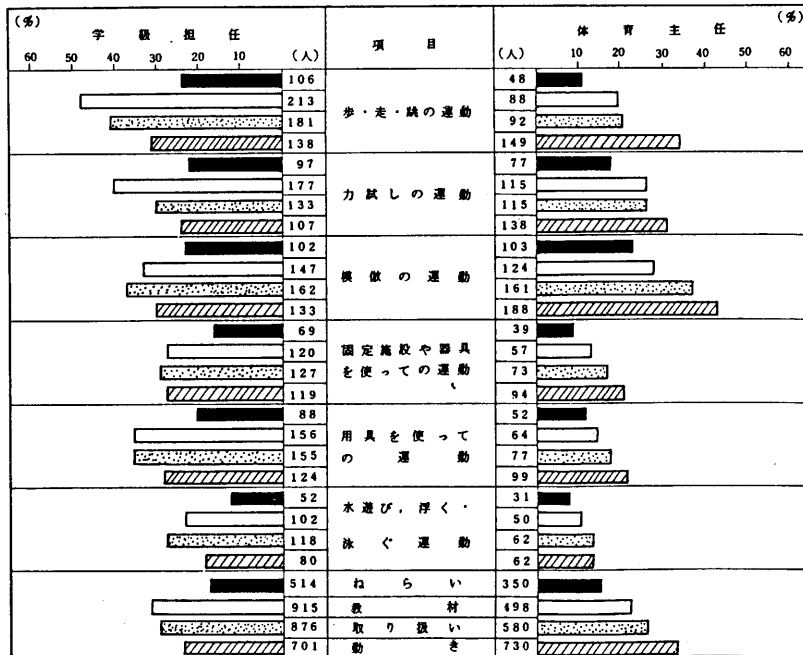
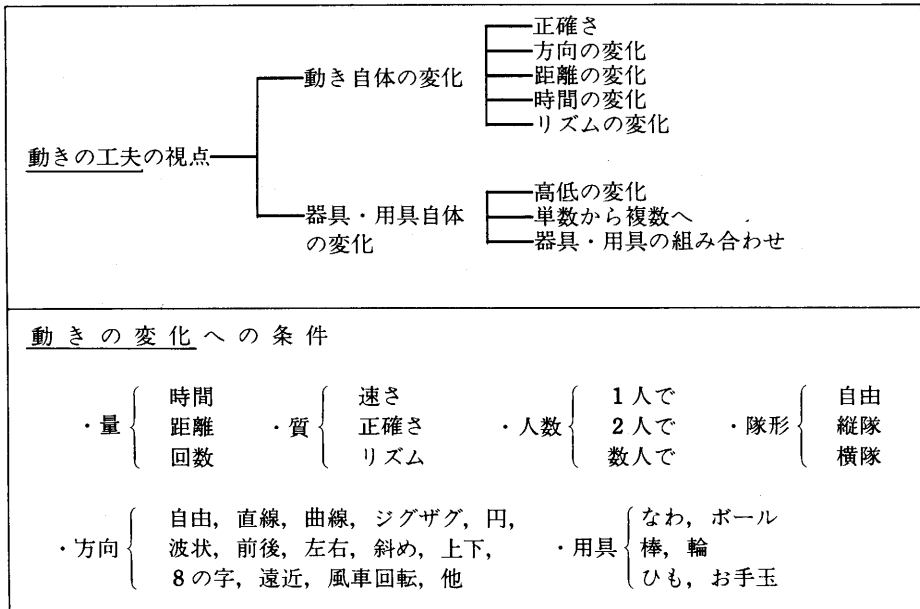
4. 教材のねらい

教材内容	輪くぐり	棒つかみ	腕立て跳び越し
動き	・回っている輪をタイミングよく素早くくぐるができるようにする。	・立てた棒が倒れないうちにいろいろな動きをして棒をつかむことができるようにする。	・跳び箱を使って、腕立て跳び越しができるようにする。
態度	・友だちとぶつからないように、囲りに注意して運動できるようにする。		<ul style="list-style-type: none"> 器具の使い方のきまりを守って運動ができるようにする。 器具の安全を確かめて、運動できるようにする。 協力して運動ができるようにする。

5. 指導計画

段階	次	時	輪くぐりと棒つかみ (2時間)	腕立て跳び越し (3時間)
導入	一次	1	・輪くぐりと棒つかみを練習試みる。(20)	・いろいろな腕立て跳び越しを試みる。(25)
展開	二次	2	・輪くぐりと棒つかみを練習する。(20)	・いろいろな腕立て跳び越しを練習する。(25)
		3	・連続してくぐるように、輪くぐりを練習する。(15)	・安定した姿勢でいろいろな腕立て跳び越しができるように練習する。(30)
	三次	4	・立てた棒が倒れないうちに、いろいろな動きをして棒をつかむことができる。(15)	・運動の条件を変えても、各自が選んだ跳び越し方で安定した姿勢を保って腕立て跳び越しができるように練習する。(30)
整理	三次	5	・輪くぐりと棒つかみの練習の成果を確かめる。(20)	・いろいろな腕立て跳び越しの練習の成果を確かめる。(25)

表6. 動きの工夫と条件一覧表²⁰⁾



(注) 表の記載区分は、次の通りである。



図1. 基本の運動における指導上の問題点に関する意識調査²²⁾

運動項目		「喜んで行った」という回答が50%以上の教材 (%)										
		提示教材	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100
歩・走・跳	歩	5/12	[Bar chart showing percentages]									
	走	6/11	[Bar chart showing percentages]									
	跳	13/21	[Bar chart showing percentages]									
力試し	一人	5/18	[Bar chart showing percentages]									
	二人	14/18	[Bar chart showing percentages]									
	重い物・三人	1/3	[Bar chart showing percentages]									
模倣	動物	3/8	[Bar chart showing percentages]									
	乗り物	4/7	[Bar chart showing percentages]									
	玩具	2/4	[Bar chart showing percentages]									
固定施設・器具	固定施設	10/12	[Bar chart showing percentages]									
	跳び箱	7/9	[Bar chart showing percentages]									
	鉄棒	3/11	[Bar chart showing percentages]									
	平均台	4/4	[Bar chart showing percentages]									
用具	なわ	25/27	[Bar chart showing percentages]									
	ボール	15/15	[Bar chart showing percentages]									
	輪	2/2	[Bar chart showing percentages]									
水	水遊び	11/14	[Bar chart showing percentages]									
	浮く・泳ぐ	10/19	[Bar chart showing percentages]									

図2. 児童が喜んで行なった教材に関する意識値調査²³⁾

児童が喜んで行った学校数の割合が高い教材		運動項目	児童が喜んで行った学校数の割合が低い教材								
100	80		60	40	20 (%)	教材	(%)	20	40	60	80
90	84	30m全力走 川跳び	歩・走・跳	2人組で2拍子のリズム カルな歩行 縦隊での リズムカルな走行	27	30					
83	81	押し出し遊び 片足づもう	力試し	かかし あざらし	39	10					
73	70	動物ごっこ のりものごっこ	模倣	犬の一日 クレーン車	38	38					
85	76	登りおり ぶらんこ遊び	固・器具	鉄棒 懸垂振り 足ぬき回り	33	37					
80	78	短なわ、両足跳び ボール転がしての的当て	用具	長なわ、跳びかわし ボールを棒で転がして 歩く	19	49					
89	79	汽車ごっこ 水かけっこ	水遊び	伏せ面遊び 水中じゃんけん	12	58					

図3. 児童の基本の運動教材に対する意識調査—第1学年—²⁴⁾

児童が喜んで行った学校数の割合が高い教材		運動項目	児童が喜んで行った学校数の割合が低い教材								
100	80		60	40	20 (%)	教材	(%)	20	40	60	80
83	82	40m全力走 ゴム跳び	歩・走・跳	2拍子 4拍子のリズム歩行 縦隊でのリズムカルな歩行	28	28					
86	84	押し出し遊び 片足づもう	力試し	胸立て回り 垂直跳び	27	30					
64	56	乗り物ごっこ 動物園	模倣	鯨の親子 野原の虫	24	39					
80	74	固定施設での登りおり マットでの転がり遊び	固・器具	鉄棒、足かけ振り 登り棒での懸垂回り	29	32					
75	73	短なわ連続両足跳び 短なわかけ足跳び	用具	長なわ回旋跳び 二人組ボール転がし合い	56	65					
80	79	水中での石拾い 水中での汽車ごっこ	水遊び	二人組での伏し浮き 水中にらめっこ	42	45					

図4. 児童の基本の運動教材に対する意識調査—第2学年—²⁵⁾

これらのことは、「基本の運動」の持つ特殊性、特異性あるいは、不合理性の表われではないかと考えられる1つの数的な根拠となるのではないだろうか。(図2・3・4参照)

次に、子ども達の「基本の運動」に対する意識度に関する調査である。図2から図6まで、それぞれの学年ごとに運動項目別で集計した結果である。すなわち、子どもにとっては、スポーツ種目的な動きのある「領域」は好まれ、体操的な動きは低値の数字を指し示している。また、遊び的要素の中でゲーム性が加味される教材が同様の傾向で高い数値を示している。

このような調査結果から考えられることは、なぜ、低学年及び中学年において「基本の運動」を「ゲーム」と分離させたのか、または、同じように1つの運動群としてまとめ、それぞれの内容項目で「運動課題」を与えての「運動領域」にしなかったのか等、「ゲーム」領域と「基本の運動」領域を区分した根拠がはたして妥当なものであったかという問題点が表出してくることを否定できないのではないかとと思われる。(図5・6参照)

児童が喜んで行った学校数の割合が高い教材			運動項目	児童が喜んで行った学校数の割合が低い教材						
100	80	60		40	20	(%)	20	40	60	80
83	50m全力走		歩・走・跳	2分間程度の持久走	29	73	高く跳ぶ		31	
74	押し合はずもう			腕立て伏臥腕屈伸	10		66	2人組での引き合い		16
84	腕立て開脚跳び		器 具	足かけ上がり・踏み越しおり	14	59		平均台、歩行、方向変換		31
78	陣2人組で移動とり			用 具	短なわ、交差跳び		51	67	ボール、高い位置での捕球	
67	長なわ回転跳び		棒、連続開閉跳び		56	66	補助具でのパタ足泳ぎ		40	
67	補助具でのパタ足泳ぎ		浮く・泳ぐ		40		58	面かぶりクロール		42

図5. 児童の基本の運動教材に対する意識調査—第3学年—26)

児童が喜んで行った学校数の割合が高い教材			運動項目	児童が喜んで行った学校数の割合が低い教材						
100	80	60		40	20	(%)	20	40	60	80
83	高跳び		歩・走・跳	しゃがんでの歩行	13	77	60~70mの全力走		13	
77	幅跳び			うさぎ跳び	13		80	馬跳び		8
77	かっつき合い		力 試 し	腕立て伏臥腕屈伸	23	57		かっつき合い		23
76	ソフトボールのストローク			用 具	短なわでのもも上げ跳び		24	73	ソフボールのストローク	
73	陣の移動とり		連続輪くぐり		53	73	長なわ、連続回転跳び		53	
61	補助具、パタ足泳ぎ		浮く・泳ぐ		友達補助の伏し浮き		26	61	補助具、パタ足泳ぎ	

図6. 児童の基本の運動教材に対する意識調査—第4学年—27)

4. 総 括

現行の学習指導要領において、新しく運動種目と運動領域の区分で設定された「基本の運動」は、理念と実践の関連の上で、その不合理性を包含している運動群であると考えられる。

すなわち、運動の特性論の立場からみた場合においては、その機能的特性からも、また、運動課題の設定からも、1つのまとまった運動群としては、基準性において一貫性がないと言えよう。この点については、「未組織」、「未分化」の運動群であるとの提示もあるが、学校教育・体育が意図的・計画的に学習を指導するという大前提に立って考えるならば、不必要な混乱を教育実践の場に招いてしまう要素を「基本の運動」は内在しているということができよう。

また、欲求充足の保障を「基本の運動」は内在しているとの提示については、簡単に是認す

ることはできないであろう。なぜならば、高学年以上の子も達に設定している従来の運動種目の中での体操的な動きの課題を「基本の運動」に包含している以上、動きの中でも体操的な動きを重視しない訳にはいかないからである。

また、欲求の充足と教師サイドからの教育的な必要の充足はどのように理念で踏まえているのか明確にされていないと考えられる。他方、なぜ、運動技能・技術の学年ごとの構造化が提示されていないのか、または、意識して表現されていないのかという疑問点がある。このことは「基本の運動」も運動の1つである以上、技術・技能の体系化を踏まえないければ理念と実践のギャップは埋まることはないのではないだろうか。

このように、果たして、現行の指導要領が提示しているように、子どものサイドからの「基本の運動」ではないのではないかと考える。反対に教師サイドからの「基本の運動」とも言い切れないと思われる。また、「ゲーム」領域との区分もあえて行なう必要性も見あたらない。現在の「基本の運動」の理念や実践を概観する時、「ゲーム」領域と「基本の運動」の領域を総称した「運動遊び」という仮称での提示のほうが、子ども達の適時性や発達段階からも、実践例を検討し、妥当ではないかと考える。次回の改訂も間近な時期であり採択を期待したい。

5. あ と が き

本研究の目的は、現行の学習指導要領において初めて、内容構成された「基本の運動」の理念と実践との関連性を分析し、考察を行ない、今後の我国の体育科教育の方向性を模索するための基礎資料を得ることであった。

その結果、「基本の運動」の理念上の不合理性と、理論と実践のギャップを指摘することができた。また、「基本の運動」と「ゲーム」の領域を統合化を提言することができた。しかし、確固たるものとするには実証研究の集積と分析を多方面から検討することも多く、今後の研究の課題となっていくであろう。

他方、今回の研究によって明らかになった資料をもとに、今後の体育科教育の方向をさらに探究していくことも今後の課題としていきたい。

引用・参考文献

- 1) アルビン・トフラー(Alvin Toffler), NHK取材班(編), 目で見る第3の波, 日本放送協会, p.22, 1981.
- 2) 朝日新聞社説, アマとプロスポーツの共存へ, 朝日新聞(朝刊), 1986. 5.9.
- 3) 井上一男, 学校体育制度史(増補版), 大修館書店, pp.124—134, 1976.
- 4) 門脇厚司, 変動社会と教育, 至文堂, p.10, 1980.
- 5) 川村英男, 戦後体育30年の歩み, 体育の科学, pp. 804—807.
- 6) 基本の運動分科会, 東京都小学校体育研究集録, 東京都小学校体育研究会, pp.11—15, 1985.
- 7) 文部省, 小学校指導書体育編, 東山書房, pp.15—20, 1978.
- 8) 文部省, 新教育指針(復刻版), 現代史出版会, pp.152—159.
- 9) 文部省, 前掲書, 7), p.1.
- 10) 文部省, 前掲書, 7), pp.6—9.
- 11) 文部省, 前掲書, 7), pp.10—12.
- 12) 文部省, 前掲書, 7), p.130.
- 13) 森山慎一, 「基本の運動」を楽しくできるようにする指導の工夫, 三誠社, pp. 113—114, 1979.
- 14) 森山慎一, 前掲書, 13), pp.1—114.
- 15) 森山慎一, 前掲書, 13), pp.12—13.
- 16) 森山慎一, 前掲書, 13), p.21.
- 17) 森山慎一, 前掲書, 13), p.37.
- 18) 森山慎一, 前掲書, 13), p.55.
- 19) 森山慎一, 前掲書, 13), p.68.
- 20) 森山慎一, 前掲書, 13), pp.14—112.
- 21) 森山慎一, 前掲書, 13), pp.96—98.
- 22) 森山慎一, 前掲書, 13), p.6.
- 23) 森山慎一, 前掲書, 13), p.7.
- 24) 森山慎一, 前掲書, 13), p.8.
- 25) 森山慎一, 前掲書, 13), pp.8—9.
- 26) 森山慎一, 前掲書, 13), p.9.
- 27) 森山慎一, 前掲書, 13), p.10.
- 28) 長池吉澄, 中学校保健体育科のカリキュラム構成に関する一考察, 兵庫教育大学・大学院修士論文, pp.147—163, 1983.
- 29) 永島惇正, 正しく豊かな学習から楽しい学習へ, 「つみかさね」・第24回全国体育学習研究協議会, 東京大会実行委員会, pp.9—14, 1979.
- 30) 中森孜郎, 体育の目的・目標の変遷, 体育科教育, p.53, 1976.
- 31) 中森孜郎, 前掲書, 30), p.57.
- 32) 成田十次郎, 保健・体育科教育の革新I, 日本体育社, p.39, 1981.
- 33) 高橋健夫, 世界の潮流にみる学校体育の改革, 体育科教育, pp.24—27, 1980.
- 34) 高橋健夫, スポーツ教育の基本理念(文部省特定研究報告書), 奈良教育大学紀要, pp.15—20, 1978.

- 35) 竹前栄治, GHQ, 岩波新書, pp. 115—117.
- 36) 竹之下休蔵, 改訂学習指導要領の狙い, 体育の科学, p. 350, 1952.
- 37) 丹下保夫, 戦後における学校体育の研究(2), 東京教育大学紀要, pp. 1—11, 1965.
- 38) 辻野昭, 小学校体育科における運動教材の変遷とその選択について, 大阪教育大学紀要, pp. 103—104, 1968.
- 39) 東京都小学校体育研究会, 運動の楽しさがわかる指導の工夫, 東京都小学校体育研究会研究集録, p. 63, 1979.
- 40) 東京都小学校体育研究会, 第19回全国学校体育研究大会・研究協議内容, 東京都小学校体育研究会編, pp. 81—87, 1980.
- 41) 東京都小学校体育研究会, 前掲書, 40), pp. 61—67.
- 42) 梅本二郎, 学習指導要領の問題点と今後の方向, 体育の科学, p. 15, 1983.
- 43) 山川岩之助(他), 基礎的・基本的事項の習得と発展, ぎょうせい, pp. 13—23, 1979.
- 44) 山川岩之助(他), 前掲書, 43), pp. 30—33.
- 45) 山川岩之助(他), 前掲書, 43), pp. 54—57.
- 46) 山川岩之助(他), 前掲書, 43), p. 56.
- 47) 矢野久英, 体育科の授業研究, 日本体育社, pp. 173—193, 1979.
- 48) 矢野久英, 前掲書, 47), pp. 87—92.

A Study on Subjects and Problems of “Kihon no Undo”

Shinichi MORIYAMA, Michio OHASHI

Department of Health and Physical Education

Synopsis

The purpose of this study was to obtain data on subjects and problem of “Kihon no Undo” in syllabus.

The results of the study of this kind will assist constructing the respective subjects of “Kihon no Undo” in syllabus in better manner.

